

田中萬年著

## 「教育と学校をめぐる三大誤解」

沖縄職業能力開発大学校 住居環境科 村上 有慶

ご存知のように、田中先生は、職業能力開発大学校指導学科の教授である。ご本人の問題関心は、いつも「職業訓練・職業教育」にある。あしがきの中で『近代国家では、国民が働くこと、国民の職業について正しく理論づけることが社会科学としての存在意味になるはずである。本書はその挑戦の第一歩でもある。』と述べている。

三大誤解とは、明治以降の「文部省」・「学校」の制度発足に伴う、「教育」という言葉の問題の意味づけについて、現在に至るまで修正されることのない、誤解のことをいっている。

本書は、江戸時代末期の寺子屋の風景を描いた浮世絵「文学萬代の寶」の口絵から始まっている。寺子屋では単に基礎的な読み・書き・算の指導だけではなく、職業に関する学習が受講者の必要に応じて施されていた。江戸期までの、藩校や郷学と寺子屋が、明治維新による国家統一によって、「学校」になるに当たって、「学校教育」による立身出世を政府が推奨し、学費は父母の負担とし、それを義務としたため、庶民は学校を焼き討ちするなどの事件が頻発し、就学率は高まらなかった。

「学校」は、「文学萬代の寶」に描かれているような寺子屋における自由でのびやかな場ではなくなった。つまり、寺子屋では「往来物」といわれるような庶民の職業に関する学習が行われていた。今日的な言葉にすれば、職業教育であり職業訓練であった。職人が学習する徒弟制度が、日本の教育制度から欠落していったのは、この明治期の「学校」の始まりからのものであった、と解き明かしている。

1871年（明治4年）に発足した「文部省」の当初の設立目的には「教育」はなかった、それは「学問」であったと分析している。翌年、制定された「学制」によれば、その「学制序文」において、『学問は身を

立てるの財本ともいふべきもの』とあるように、「学校」は、そもそも「学問」を修めるべきところであり、「教育」を行うところではないとしている。

後の初代文部大臣の森有礼が、「教育令」改正に当たって、国家が臣民に要求する「教育」と、臣民が自分のためにする「学問」とを、峻別し、「文部省」は、「教育」を行うために「学校」の運営を行うべきと指導したことをあげている。すなわち、文部省の業務をその設立の当初から「教育」の実施だとするとらえ方は重要な誤解であると解いている。

「教育」という用語が、いつからどのようにして使われるようになったのかについては、中国における孔子・孟子から、英語のEducationの検証から、事細かく解き明かしている。「教育」が日本において定着するようになったのは、1890年（明治23年）の「教育勅語」であり、「文部省」が国民思想の統制機関たる役割を果たすようになった、という。

こどもと学校をめぐる、さまざまな事件にうんざりするような思いを抱いている今日、職業教育に携わる私たちが、原点に立ち返って学びなおしてするための好書であると思う。

### 「教育と学校をめぐる三大誤解」 目次

- まえがき 忘れられた学問のための「文部省」と「学校」
- 第1章 文部省の成立と変質
- 第2章 学校の成立と変質
- 第3章 「教育」とは何か
- 第4章 “Education”とは何か
- 第5章 「教育」は“Education”ではない
- 第6章 工場における「学校」の成立
- 第7章 社会における「学校」の成立
- おわりに 真の「学校」改革のために

(学文社、2006年4月、本文203ページ四六版、1,500円+税)